

Title	<批評・紹介>聶寶璋著「中國買辦資產階級的發生」
Author(s)	黒田, 明伸
Citation	東洋史研究 (1981), 40(1): 160-166
Issue Date	1981-06-30
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/153806">http://dx.doi.org/10.14989/153806</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

聶 寶 璋 著

# 中國買辦資產階級的發生

一九八〇年一月 北京 生活・讀書・新知三聯書店 A5版 七七〇頁

黑 田 明 伸

歴史家もまた歴史的存在である以上、歴史的事實に對する評價は、それを研究對象とする歴史家の主觀を超えて彼のおかれた時代の性格からの規制を受けざるを得ない。買辦をめぐる研究もその例外ではなく、それどころかその顯著な例と言える。そしてその規制の受け方は中國近代史研究の動向を如實に反映したものであり、買辦をどう評價するかが研究者の立場の試金石であるかの如きでさえあった。

過去の買辦研究史を振り返ると、凡そ三種に分類できる。一つは、根岸佶<sup>(1)</sup>に代表される戦前の日本人研究者のそれである。概して、買辦商人たちの傳統的性格、強い地縁結合、民族性を強調し、列強の經濟侵略に對する買辦制度の抵抗作用を論じている。こうした見解を生む背景として、一つには戦前の中國認識の限界、つまり東洋的神祕性・停滞性認識があったのであり、また一つには當時日本帝國主義にとって開港場を基盤とする「紳商」たちこそが當面の經濟上・政治上の競合對象の一つとして意識されていた状況があった。これらの研究が同時代的に一方の當事者側からなされたものであるのに對し、一九四九年以降、つまり買辦制度消滅後なされ

た二つの方向の研究は、ある意味で客觀的な面もあるが、しかしその買辦評價は、政治的色彩を帯びがちであったことは否めない。その一方の方向とは、アメリカを中心とする近代化論的觀點であり、Yen-ping Hao (郝延平)<sup>(2)</sup>に代表されるものである。アメリカの近代中國研究者の一般的見解であるが、一九世紀後半から二〇世紀にかけての列強による中國への經濟進出は、決して量的には大きなものではなく侵略と言える程のものではなかったものであり、列強の資本投下はむしろ他地域に向けられていたとし、また、經濟接觸によつて中國に與えた近代化のための連關効果を相當なものとして評價する。その基本線に従つて、買辦制度の存在は歐米資本主義側にとつてはコスト高になるものであったので、かえつて經濟進出を弱める原因となつたとする。さらに特徴的なのは、買辦層を近代化にとつて障害となる中國的傳統から脱却した、企業家精神に富み政治的にも革新性を帯びた近代化のリーダーとして扱っている點である。歐米的(さらに言えばアメリカ的)市民社會を自ら體現し、さらにそれを積極的に移入しようとする者こそを社會發展の擔い手とするが如き觀點が、新植民地主義とタイアップする面があったことは否めない。

これに對して、全面的に反對の側にあるのが、誰よりも毛澤東に代表され、黃逸峰等中國の研究者たちが主張してきた見解、すなわち「買辦資產階級」を帝國主義に從屬し國內封建支配層と連係した、農民とその他大衆と敵對する最反動層として扱えるものである。極言すれば、基本的に一九四九年を解決點とする中國近代史を、南京國民黨政府・四大家族に收斂される世界帝國主義に從屬する側と、中國共產黨に收斂される勞農大衆の側とが兩極に分解し、

両者が生成發展する過程として把える歴史観がある。この觀點に基づいて、四大家族へと續いてゆく「買辦資產階級」の發生史を、狹義の買辦、買辦制度の生成・發展を通して跡づける必要性があった。その要請に應えた決定版とも言えるのが、この蕭實璋氏の研究である。そしてこのことが嚴然として蕭氏の論を規制しているのである。

本書の構成は次のとおりである。

## 序言

### 一 中國買辦資產階級的發生

#### (一) 前言

(一) 鴉片戰爭後通商口岸買辦勢力的興起及其職能

1 買辦是侵略勢力擴張の產物 2 捐客的職能及其活動 3 洋行買辦の職能及其活動 4 買辦制度的形成

(二) 買辦資本の擴張和買辦資產階級的發生

1 買辦資本在外商企業中の附股活動 2 買辦資本向華商企業の擴張 3 商品流通渠道の買辦化 4 買辦資本向行會組織的滲透 5 洋行買辦勢力向封建政治舞臺の滲透

#### (四) 結束語

### 二 從美商旗昌輪船公司的創辦與發展看買辦的作用

(一) 旗昌輪船公司的創辦者——旗昌洋行與行商、買辦的勾結

(二) 旗昌輪船公司創辦階段對買辦華商資本的利用

(三) 旗昌輪船公司壟斷地位的形成及買辦華商的作用

(四) 怡和、太古輪運勢力的發展及其對旗昌壟斷地位的威脅

(五) 旗昌輪船公司清算過程中買辦的作用

#### (六) 結束語

### 三 十九世紀後期買辦商業高利貸剝削網的形成

#### (一) 買辦職能的發展變化

1 買辦的經銷與承購 2 買辦的包購與包銷 3 買辦制度的變化

#### (二) 買辦勢力的擴張和華商買辦化的加深

1 買辦利用中外反動勢力的特權對華商的控制 2 買辦資本對華商的控制 3 買辦化華商勢力的擴張

#### (三) 進出口商業買辦高利貸剝削網的形成

1 洋貨推銷網的形成 2 土產收購網的形成

#### (四) 結束語

この書は個別の三本の論文を合わせたものである。序言によればいづれも一九六〇年代に書かれたものであるが、第二篇「從美商……」が一九六四年第二期『歷史研究』に於て發表されたのみで、他二篇は文革の影響で發表の機會が得られなかったものである。それが七九年になって刊行されるにいたった背景には、一つには、文革による學問研究の後退狀況の克服のための第一歩として、文革前に到達した水準を再確認する必要があるということが推察される。そういった一般的事情とは別に、現實の政策の近代化路線は、何らかの形で近代史の見直し、そして、その重要要素としての買辦と買辦制度に對する再檢討を惹起せずにはいないという狀況がある。實際、最近發表された研究を見ても、張國輝氏は、買辦層を大買辦と中小買辦に分類し、反動的な前者に對し、後者を挫折させられたものの民族資本として成長する可能性を帯びたものとして評價している。また汪熙氏は張氏のような分類をぬきにして、生産力發展に一定の役割を果たしたとして（まだひかえ目ではあるにせ

よ)、買辦再評價の先鞭をきった。そういった一方の動向に對峙するのがこの聶氏の論考である。

第一篇は、アヘン戦争前後から一八七〇年代までの時期を取り扱っており、買辦制度が開港場に成立するまでのその發生史を探究した前半部(一)と、買辦層がやがて成長して「買辦資産階級」を形成する過程を分析した後半部(二)の二部分から成る。比較のためまず述べられている、公行制度の買辦の役割についての概括、五港開港後外國商人側に買辦のような仲介者の存在の不可缺性を認識させた原因としての民衆の外國商人に對する攻撃・中間商人による内地流通の獨占的掌握の指摘は、從來の研究と基本的に異なる點はない。聶氏が力點をおいているのは、背景説明よりも買辦層形成の系譜である。人脈の系譜として、公行制度の遺産としての廣東籍買辦と、その後五〇年代に擡頭してくる寧波籍を中心とする「土着買辦」の存在が明らかにされる。が、特に注目すべきは、氏が「買辦隊伍」を捐客と洋行買辦の二つに分類し、經濟機能上の系譜に迫った點である。聶氏によれば、捐客は元來手数料を取得して賣買の取り持ちをし、それによって生じる損得には責任を負わない。また契約は臨時的なもので、洋行内の事務を擔當するようなことはなく、これらの點で狹義の買辦との差異を有していた。聶氏は捐客を、「地方封建勢力」との強い連係を背景に、洋行の代理人として内地買いつけを業務としはじめ、また外國商人と資本關係を結んだ先驅として把え、彼らを買辦名義を持たない買辦大商人と規定している。一方、洋行買辦は、單なる洋行内の會計・雜務の管理係にすぎない存在であったが、しだいに洋行の經營にも進出し、さらには獨立した自身

の商業經營にも乗り出すようになり、洋行側は概してそれを放任したとする。聶氏はこの捐客と洋行買辦が徐々に相互轉化し一體化して買辦層を形成したとの見解を示す。捐客の「地方封建勢力」なるものとの親密な關係がいかにして形成されたのか、また牙行・客商との歴史的脈絡の有無、また捐客と洋行買辦の相互轉化を可能にする條件の提示がない、といった問題點はあるが、買辦層の出自を劃一的に把えずに仲立人と洋行内の中國人事務員の雙方からの成長合體と把える見解は、今後さらに検討されるに價しよう。

後半部は、「買辦資産階級」の發生過程として異なる五點を提示する。第一點は、旗昌輪船公司を典型例とした、一八五〇年代から六〇年代に一般化する買辦資本の在華外國企業への投資。第二點は錢莊業を典型例としての、六〇年代から七〇年代にかけての中國企業内における買辦資本の急速な膨張。第三點は、内地商品流通を擔う中間商人たちが、商品輸送の安全確保と釐金逃れのために、買辦を通して、外國旗を購買したり、外國商人の名義で通關手續を濟ませるようになった狀況。但し、こういった事が、果たしてどの範圍まで普及していたのかは明らかではない。第四點は、舊式商人中心の公所から、買辦商人中心の公所への移行である。例としてあげられている、抵抗しつつもしだいに新式汽船との競争に敗れていく沙船業に關しての敘述は、未開拓の研究分野でもあり非常に興味深い。が、「買辦化」の過程として把えるべきかどうかは疑わしい。第五點として政治的に「買辦化」してゆく官僚たちと、捐納によって官品を得ようとする官僚指向の徐潤等の買辦たちとの、太平天国鎮壓を通しての接近をいう。洋務運動を兩者の結合過程とし、そしてそれを、「官僚買辦資産階級」の發生とする。しかし、當然あったは

ずの兩者間の矛盾を全く捨象している。

個々の點に於ての問題もさることながら、最大の缺點は、この五點が並列的に論じられているだけで、有機的連關が明確にされていないことである。あれもある、これもあるでは説得力がないと言えよう。

第二篇は、買辦資本の對在華外國企業投資の典型例である一八六二年開業の米國系企業旗昌輪船公司の十五年間の歴史に焦點をあてたものである。

まず前史として、かつてアヘン密輸を主としていた旗昌洋行が公行商人と結託する中で經營を擴大し、開港後は、上海に於て確固たる地位を築き、一時金融面で Oriental Bank を凌ぐ程の力を誇つたが、英國系銀行・洋行の追撃を受ける中で經營維持のため多角化を迫られ、輪船公司設立が企圖されるに到る背景が説明される。この部分は、数少ない米系洋行研究としても價值あるものである。

展開部分で注目すべきは次の二點である。第一點。當時、天津條約による揚子江航行權獲得、太平天国戰爭による中國木船貿易の完全中斷の狀況に於て、輪船公司設立は、各洋行が企圖したことであったが、その中で旗昌が先行することができた原因として、上海の有力中國商人の投資の獲得を指摘し、旗昌洋行自身の投資は極小であつた點を明らかにしたこと。そして營業開始後獨占的地位を得ることができた原因として、同公司在一方で中國人荷主に對して同系の倉棧・保險公司での優遇等の手段を用い、また一方で買辦を活用して注文を取りつけたことを明確にしたのは、大きな業績である。

第二點。スエズ運河開通等の交通革命を期として揚子江航路が國際航運資本の競争の場となつたとの認識の下、同公司在ライバルの怡和、太古との競争に破れて破産し、招商局に賣却されるに到つた原因を次のように分析している。(1)經營内部に於ける揚子江航路を中心とするダンピング操業による赤字。(2)木製船から鐵製船への移行。(3)南北戰爭後のアメリカ本國に於ける經濟繁榮が、本國內への資本引き上げを促した。(4)最も興味深い指摘であるが、買辦の力量の差を重視する。具體的には、旗昌の買辦陳竹坪が、怡和の唐景星、太古の鄭官應の敵ではなかつたということである。洋行間の競争が現實には買辦間の競争にはかならないとの見解は、今後の研究に新しい地平を切り開いたものである。また聶氏は招商局への賣却に際して、旗昌洋行は監督權を確保したと論ずるが、残念ながら、その後その事が實質的にどれほど影響を及ぼしたかについては言及されていない。

第三篇が、何意圖した論文であるかは、冒頭の毛澤東選集からの引用が明らかにしている。すなわち、帝國主義に從屬する「買辦的和商業高利貸的剝削網」對「中國農民和其他人民大衆」の構造の成立過程を立證することである。毛澤東の見解に従い、聶氏はその成立時期を一九世紀後半に定め、その「重要組成部分」である買辦の職能の發展を通して、いかに「剝削網」形成が進行していったかを跡づけようとする。

まず背景として外的要因が提示される。スエズ運河開通、上海ロンドン開海底ケーブル敷設といった技術革新が、洋行の獨占的商業利潤を成立させる基盤を崩し、手数料取引を主とする代理商に性格を轉化させてゆくという定説化した從來と同じ見解を示す。それに加えて、交通技術革新、洋行間の競争激化の割に市場擴大が進行しない中で、輸入が停滯し、外國銀行・洋行全體が危機にさらされる

七三年の状況を説明し、買辦の職能の變化を呼びおこさざるを得ない背景とする。

展開部の内容は次の三つの論點から成る。第一點は買辦の職能の擴大である。洋行側要請に應えての輸入品の取次販賣・一手販賣、輸出品の購入請負・一手購入。買辦が洋行名義で商賣する「假冒洋行」の出現・増加。洋行の資金調達。あたかも貿易に關する何から何まで總てに買辦が介在するが如きに到つた過程が描きだされる。

第二點は、聶氏の論の成否を握る一般中國商人の「買辦化」論である。論據は三點である。(1)子口半稅單照の役割。已に S. F. Whit によって言及されてゐたことであるが、内地中間商人が釐金を逃れるため子口半稅單照を入手利用する事態が、商品取扱人の國籍を不問にした一八七六年の煙臺條約以後、促進された。但し、買辦の具體的役割については、聶氏は單照入手のためには買辦の手を經ねばならず、それによつて中間商人に對するその支配が強まつたと推測するのみである。(2)一部地域で釐金の包徴が「大買辦」に委ねられたこと。(3)貿易の中樞的機能を果たす錢莊・棧號への買辦の投資の増加。(2)・(3)は買辦の政治力・經濟力が増したことを證明するが、かと言つて、買辦が洋行に從屬しつつ中間商人を支配下に組み込むような過程として把えるには、かなりの論理的媒介が要る。

第三點。前の二點を踏まえて、聶氏は輸出入商品流通網に沿つての金融支配體系の成立を主張する。この主張は聶氏の論全般にかかわる問題であるので、論評は後に回すこととし、ここでは、二つの點を指摘するにとどめる。聶氏が輸入品販賣に於て、中間の中小資本がそれに携はることを可能にした除銷(掛賣)の機能を示したの

は、聶氏の剝削論に實在感を與えてゐるが、果たして、除銷制度が、買辦によつて主體的に創造されたものなのかどうかは疑問である。既存の商慣習に、輸入品販賣も依るしかなかったというのが實情だつたのではないかと評者には思えるのだが。それと關連することであるが、聶氏が七〇年代に多くの中間商人が出現し、彼らに對する外國銀行や錢莊の貸附業務が發達したと強調された點は興味深い。ただ、それらが新たに創出されたものなのか、それとも既存の流通構造の強化なのかについては、評者には判斷しかねる。

最後に聶氏は論ずる。こうして形成された「買辦商業高利貸剝削網」は貿易量を増大させるが、それは半植民地經濟の進展を示すものであつた。外國商人・買辦商人たちが利益を得る一方で多くの中國商人が破産してゆく過程であつたのである。「買辦資產階級」こそは、「國際資產階級」に從屬し、中國の生産力發展を阻害する、「最落後・最反動」的存在であつた、と。

この聶氏の論全體は、第三篇に於て、開港場の外國銀行・洋行を頂點として買辦そしてさまざまな「買辦化」した中間商人、小賣商を經て直接生産者たる農民を掘野とする金融支配體系に集約される構成になつてゐる。従つて、次の二つのことが論の成否の鍵となる。

第一には、そもそも流通過程に於けるその當事者間に支配從屬關係を論ずる際、何を分析手段とするか。特にこの場合は、貸借關係・資本關係をどのようにして理解するかである。第二には、流通網形成の主體を何に認めるか。またこの段階の流通構造をどのように史的に位置づけるかである。言うまでもなく、この二つの問題は論理次元を異にするが、前者は後者の前提としての位相を有する。

まず第一點に關して、聶氏が金融に着目したのは炯眼であると言  
えるが、貸借關係を即目的に借方の貸方への從屬とみなすのには、  
やや疑問を覺える。借方にとってその融通が、全運用資金の中で何  
程の位置を占めるのか、またその運用によって得られる利潤と利子  
の相對比が検討されてこそ、はじめて説得力を有するようになる。  
特に中間商人の「買辦化」を考えるには、不可欠な作業である。ま

た氏は洋行買辦を僕役的身分から脱し得ないものと扱っているが、  
洋行經營者と買辦との間の本質的な力關係は、制度面からだけでは  
不十分で經濟面からの分析無しには解明できない。聶氏が明らかに  
したように、この時期の在華外國企業の設定要件として中國資本の  
大量募集が不可欠であり、また經營に於て、買辦がいかなる力量を  
有するかが死活問題であるとしたら、實質的な經營權が誰の手にあ  
ったか、また利潤分配はいかようであつたか検討し直してみる必要  
がある。

さらに考慮せねばならぬ點であるが、買辦をはじめとして上海等  
の中國商人は、危険分散のため自己の資本を多方面に投資する傾向  
がある。従つて特定の外國銀行・洋行との關係惡化が即目的に、そ  
の取引關係・資本關係を有する中國商人の死命にかかわるとは言い  
にくいのである。この十九世紀後半期の段階で、開港場經濟に於  
て、外國資本側がどの程度までイニシアチブを握っていたかも再考  
される必要があると思われる。

第二點に關して言へば、聶氏の見解には、かなり外的要因を決定  
的なものとして扱っている傾向が見られる。しかし、開港場を最終  
的結節點とする流通網の形成に關しては、もっと内地中間商人達の  
主體性に着目すべきではないか。聶氏自身が指摘しているところ

の、外國商人の持つ子口半稅特權等を利用して釐金等の官僚からの  
收奪に抵抗しようとする内地中間商人の姿は、一方的に彼らが買  
辦・外國商人を通じて「國際資產階級」に從屬してゆく過程として  
よりも、むしろ國家統制を切り崩し自由交易を原則とする全國的統  
一市場成立を指向するものと評價した方がリアリティーがあるので  
はなからうか。評者が讀む限りでは、他律的に引き起こされた狀況  
の變動を利用して、巧みに自己經營の量的・質的擴大をはかる中國  
商人の活潑な動向こそ印象づけられるのである。また、少なくとも  
この段階に於て、買辦制度も含めて、流通構造は、相當分、個人的  
信用に依つて維持されている以上、それを通しての流通規模はある  
程度以上の増大を望み得ない。故に外國資本主義にとって決して満  
足できるものでなく（だからこそ、一九世紀末から買辦制の廢止あ  
るいは改變が進められた）、消極の意味で中國側からの逆規制作用  
を果たしていたとする、内田直作<sup>の</sup>から Yen-ping Hao に到るまで  
形を變えてなされてきた見解には、聶氏は有效な反論を提供し得て  
いない。

本書に於て聶氏が行なつた旗昌輪船公司を對象とする個別經營分  
析は、今後なされるべき研究の方向の先驅的業績といえる。また、  
その他、これまでの水準を超えた指摘が數多く含まれている。しか  
しながら、それらが客觀的に明示していることと、聶氏の論理展開  
が整合しているとはいえない點がままあるのは、冒頭に述べた如  
く何よりも歴史家自身が歴史的存在であることのあらわれであろ  
う。

最後に研究の若干の展望を述べさせてもらうと、何よりも第一

に、聶氏がなされた如く、個別經營分析を、史料上可能な限り、積み重ねてゆく必要がある。また、結論的には聶氏等と共通する、フランク・アミン等の新從屬派が依據する「等價值に基づく不等價交換」理論の活用が可能であるやもしれない。そして、一方の側である洋行・外國銀行の活動に關して未だ充分な研究がなされているとは言えない。特に本國の經濟狀況との有機的關連に關してはその感を強くする。一八七三〜九六年のヨーロッパに於ける「大不況」が在華洋行・外國銀行にどれほどの影響を與えたかについては研究は皆無であると言つてよい。中國内流通構造のさらなる研究と共に、今後の研究がまたれる分野である。

- (1) 根岸佑『買辦制度の研究』東京、一九四八年。
- (2) Yen-ping Hao, *The Comprador in Nineteenth Century China: Bridge between East and West*, Harvard Univ.,

# 正誤表

## 第三九卷第四號

六七五頁一三行目	四十冊→三十四冊
六九四頁九行目	一二六〇—七六、年→一二六〇—七七、年
七〇一頁七行目	[3.] → [13.]

1970.

- (3) 黃逸峰「關於舊中國買辦階級的研究」、『歷史研究』一九六四年六月。「帝國主義侵略中國的一個重要支柱——買辦階級」、『歷史研究』一九六五年二月。
- (4) 張國輝『洋務運動與中國近代企業』北京、一九七九年。
- (5) 王熙「關於買辦和買辦制度」、『近代史研究』一九八〇年第二期。
- (6) S. F. Wright, *China's Struggle for Tariff Autonomy*, Shanghai, 1938.
- (7) 内田直作『買辦制度の研究』、『支那研究』四七號（一九三八年七月）、四八號（一九三八年十二月）、四九號（一九三九年一月）。

一九七九年一〇月 北京 中國社會科學出版社 A5判 一八三頁